

実施報告書

HT26116

病を癒す心の力をあぶり出す！？
－ハリの実験で「治療効果の方程式」を考えよう！－



開催日：平成26年8月1日(金)
平成26年8月3日(日)
実施機関：東京有明医療大学
(実施場所) (実習室、附属鍼灸センター)
実施代表者：高倉 伸有
(所属・職名) (保健医療学部・学科長・教授)
受講生：第1回 高校生18名
第2回 高校生21名
関連URL：<http://www.tau.ac.jp/outreach/hirameki/2014/takakura.html>

【実施内容】

「鍼(はり)治療」は、補完代替医療・東洋医学的な医療のひとつとしてヨーロッパやアメリカでも普及し、鍼治療の有効性やそのメカニズムに関して、現代西洋医療に基づく科学的な研究が進められています。しかし、「鍼」の経験がある高校生は少なく、「鍼治療」を知っていたとしても、痛そうとか、怖そうとか、効果があるのかとか、ツボって何なのか等、不安や疑問を抱く方も多いかもしれません。本プログラムでは、そんな受講生でもわかりやすく楽しく参加できるように、「鍼」を見て触って刺して感じる、という日常ではできない実習をたくさん取り入れて、最初に「鍼」や「ツボ」について勉強しました。そして「鍼治療」を題材として、サイエンスの目で治療の効果を判定する重要性と、その効果に隠される心の作用について、国際特許の鍼を使った実験などを通じ、本学学生や教員と一緒に考え学びました。

(1) 当日の実施スケジュールと実施の様子

講義担当・実習実験のナビゲーター：高倉伸有
実習実験のナビゲーター：矢島裕義・高山美歩
サポーター：(学生)本学鍼灸学科2～4年生の選抜メンバー
(鍼灸師)本学鍼灸学科卒業生・本学大学院1～2年生・研究員

10:10-10:30 受付

10:30-10:50 開講式・オリエンテーション・科研費の説明

実施代表者が、科研費とそれを支える日本学術振興会の説明をし、科研費は大切な税金から支出されていること、受講生の皆さんのような若者たちが、研究を通じて未来を切り拓いていく人材であることをお伝えしました。

10:50-12:00 【講義】「ハリ(鍼)・ツボってなんだろう？」

(休憩含む) 【実習】「ツボを探してみよう！」「ハリを〇〇に刺してみよう！」

午前中は、講義や実習を通じて鍼やツボがどんなものなのかを学びました(写真1)。そして実際に、鍼の太さを測ったり、サポーターがツボ探しを実演したり、受講生が自分でツボを探したり(写真2)、ユニークな鍼の刺し方の練習法を体験したりしました。



写真1 ツボに関する講義



写真2 ツボを探そう(実習)

12:00-12:50 ランチャイム

12:50-13:10 東京有明医療大学 附属鍼灸センター 見学

本学カフェテリアにてランチャイムをとり(写真3)、サポーターや実施者との交流の時間をもちました。その後、鍼治療の現場である附属鍼灸センターに行き、施設や治療の見学をしました(写真4)。



写真3 ランチャイム



写真4 鍼灸センター見学

- 13:10-15:10 【講義】「見かけの治療効果」
 (ティータイム含む) 【ディスカッション】「治療効果を高める心の働き」
 【ミニ実験】「刺さった？刺さらなかった？実験」
 【まとめ】「ハリの治療効果の方程式！？」



写真5 ティータイム



写真6 鍼治療の様子(寸劇)



写真7 & 写真8



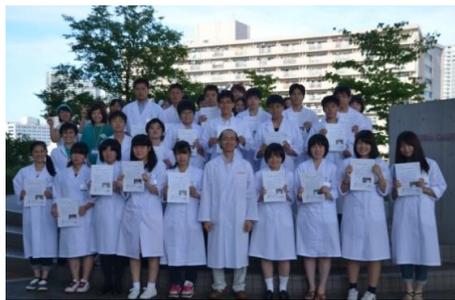
刺さった？刺さらなかった？実験

午後はティータイム(写真5)をはさんで、講義を受けながらその合間に、鍼を題材としたサポーターと実施者による寸劇(写真6)を見たり、鍼治療の様子を観察して意見を述べたり、実際に鍼を受けたり鍼を刺したりする実験に全員が参加しました(写真7・8)。また、鍼を題材として医療の臨床実験によって得られる治療効果について考えました。プログラム全体を通じて、学んだことや実施したことはレジュメ(図1)に記録・記入して、成果を確認していきました。

15:10-15:40 修了式・未来博士号授与・記念撮影



写真9 (左:8月1日) & 写真10 (右:8月3日)



受講生・サポーター・実施者全員で記念撮影

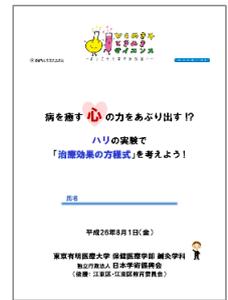


図1 レジュメ(表紙)

修了式では、実施代表者から受講生一人一人に未来博士号(修了証書)が授与され、本学内のサクラガーデン(中庭)で記念撮影をして終了しました(写真9・10)。終了後には、受講生同士が仲良くなって、一緒に帰っていく場面も見られました。

(2) 受講生に分かりやすく研究成果を伝えるために、また受講生に自ら活発な活動をさせるためにプログラムを留意、工夫した点

- ・プログラム内に実習や実験を多く設け、数種類の鍼を見て触って確認したり、自分でツボを探したり、鍼を自分で刺したり鍼を受けたりするなど、受講生が主体となるような体験を積極的にしていただけるようにしました。
- ・講義や実習、実験の際には、専門用語を噛み砕いてわかりやすく身近な言葉で伝えるようにしました。特にスライドを用いて説明する際は、写真やイラスト、図などを使って、視覚的に情報が得られるよう、工夫しました。また、書画カメラを駆使し、参加者全員で臨場感を持って共有できるようにしました。
- ・実習や実験の際には、受講生1~2名につき1名の実施者またはサポーターを配置し、実習や実験に積極的に楽しく参加できるよう、また受講生が自由に思いや感覚を表現したり、意見や考えを書いたり述べていけるよう配慮しました。また本プログラム終了後にも、受講生が、一緒に参加した保護者と意見交換等をしていただけるようになることを想定して、保護者にも受講生の近くで実習等を見学(あるいは一部のものについては体験も)できるようにしました。
- ・実施当日は、実施協力者(本学学部生・大学院生・学部卒業生・研究生)を[(受講生の)サポーター]と呼称し、受講生の近くで常にサポートできるようにしました。
- ・実施者とサポーターによる寸劇を、講義内に3回取り入れ、難しい内容を楽しく具体的に、また印象深く伝えられるよう、工夫しました。
- ・プログラムのレジュメを作成し、学んだことを書いたり、実習したことを記録したり、考えたことを表現したりできるようにしました。レジュメには、考えるポイントを示しておきました。また、レジュメに記録することによって講義の内容が完成する、といった工夫をしておきました。
- ・大学に併設する附属鍼灸センターで鍼の臨床の場を見学することによって、鍼治療の実際を知っていただけるような時間を設けました。また特に今回は、国家資格を持って実際に臨床の現場を経験しているサポーター(鍼灸師)を多く配置し、鍼の臨床におけるサイエンスの意義や必要性が少しでも伝わるよう、またそれを通じてより鍼治療に興味を持っていただけるよう、配慮しました。

(3) 事務局との協力体制

- ・プログラムの実施にあたり、実施者と、事務局財務部(公的研究支援室)、総務部(広報担当)、情報センターとのミーティングを何度も実施し、広報活動、募集対応、事前準備、当日運営等について綿密な計画を立てて臨みました。
- ・財務部(公的研究支援室)は、日本学術振興会との連絡調整や書類確認・提出、委託費の管理、受講者の申込受付および出欠管理・参加者通知の発送、当日の運営サポート等を行いました。
- ・総務部(広報担当)および情報センターは、広報活動(下記参照)および当日の運営サポートを担当しました。

(4) 広報活動

- ・本学オープンキャンパス等に参加した高校生に、本プログラムの案内をしました(総務部広報担当・実施者)。これをきっかけに参加してくださったのは、全受講生のうち12名(36%)でした。
- ・大学案内の請求や進学ガイダンス等のイベントを通じ、それまでに本学と接触のあった高校生約500名に、本プログラムの開催案内をハガキで送付しました(総務部広報担当)。
- ・高校の学外授業として高校生が本学に訪れた際に、本プログラムのチラシを全員に配布しプログラムの魅力を説明して参加を働きかけました(実施者・総務部広報担当)。
- ・本プログラムのポスターを作成し、高校訪問時に配布し(70校)、高校の進路指導担当の先生に内容を説明し、興味を持っている高校生に告知していただきました。また、お付き合いのある高校(108校)に作成したチラシを配布し、広報にご協力いただきました。
- ・本プログラムのポスターを江東区内の広報板に掲示した他、本学の沿線に掲出している電車内広告に本企画の案内を掲載しました(総務部広報担当)。
- ・本学の所在地である江東区ならびに江東区教育委員会に、本プログラムの後援をしていただき、ポスターやホームページ等でその旨を告知しました(財務部公的研究支援室)。
- ・本プログラムの案内を、江東区報(28万7000部)および近隣の情報誌「東京シーサイドストーリー」(40万部)に掲載していただきました(財務部公的研究支援室・実施者)。
- ・本プログラムの案内を大学Webページに掲載しました(情報センター)。大学のWebページには約1055回のアクセスがあり、ここからの参加申込は全受講生のうち12名(36%)でした。
- ・本プログラムの案内を、学外の進学情報サイト(マイナビ進学等)に掲載しました(情報センター)。
- ・日本学術振興会HPからの申込は、全受講生のうち6名(15%)でした。

(5) 安全配慮

- ・鍼は通常用いる場合には侵襲を与えるものであるため、扱いには十分に注意を促しました。鍼を用いた実習・実験時は、受講生1~2名につき1名の実施者またはサポーターを配置し、いつでも目の届く範囲で行われるよう配慮し、問題なく終了しました。
- ・受講生、実施協力者および実施者を対象とした短期の傷害保険に加入しました。体調不良の者が出たときに備え、本学の附属クリニックの医師が診察対応できるよう配慮しました。幸いそのような対象者も出ずに、無事に終了しました。

(6) 今後の発展性・課題

- ・関東圏の高校生の鍼の認知度が非常に低いため、受講生の確保には毎回苦心しています。昨年のプログラム終了時に、対象となる(この分野あるいはプログラムに興味を持つ)高校生に効果的に情報提供し、より発展的なプログラムとして継続的にこの事業を実施していくために、それぞれの広報活動の有効性を分析できる情報や、プログラム中の各内容についての受講生の満足度や理解度の情報を得るための、実施者オリジナルのアンケートを実施しました。その結果、受講生にとって参加のきっかけとなったキーマンは、高校の先生や友人、家族が多かったことから、今回はそのキーマンへのアプローチに力を入れた広報活動を行いました。結果的には、プログラムの開催前に本学との何らかの密接な交流(オープンキャンパスや進学ガイダンスなど)があった受講生が多くを占めており、例年と同傾向でした。また更なる受講生の確保のため、プログラムのキーになる部分については、医療全般にかかるように工夫しており、鍼を知らない高校生にも鍼治療、補完代替医療の領域を知ってもらい、鍼を通じてサイエンスのおもしろさを感じられる機会となるよう、特に医療全般に関心を持つ受講生を広く募集することを視野に入れた広報活動を行いました。しかし、これまでに鍼とは全く縁のなかったであろう(鍼のことを知りたいたいとコメントしていた)日本学術振興会のホームページから参加登録をした高校生のキャンセルも数名ありました。受講生を確保するためには対象を

広げることも必要ではありますが、むしろ鍼そのものに関心を寄せている高校生にきちんとした情報を与えて、その興味を更に引き出してあげることがより重要であると感じました。

- ・ 本プログラムを受講したいという高校生から、プログラムの実施日が夏休みに入ってからであるため、直前にならないと部活動の練習や試合(勝ち進んでいった場合)などがあるか否かわからず、受講を希望しにくい、との指摘が複数ありました。またそのような理由から、プログラムに興味を持っていたにもかかわらず申し込みのタイミングを逃してしまうなどの事例もあったため、これらを考慮してプログラム実施日を設定する必要があると考えられました。
- ・ 今回は受講生のキャンセルが比較的多くありました。個人情報の提供を同意の上で参加登録をいただいているため、簡単な気持ちで申し込んでいるのではないと思いますが、次回実施の際にはキャンセル者をできる限り少なくできるような対策を立てなければなりません。特に、上述したようなプログラム実施日の部活動の有無は、キャンセルの要因の一つである可能性があるため、キャンセルが生じた場合でも十分な受講生を確保できるよう、申込締切日を直前に設定するなどの柔軟な対応ができるような態勢を整える必要があると考えます。

【実施分担者】 矢嵐 裕義 保健医療学部・講師
高山 美歩 保健医療学部・助教

【実施協力者】 第1回 14名 第2回 12名
保健医療学部・鍼灸学科 2～4年生、大学院・保健医療学研究科 1～2年生
保健医療学部・鍼灸学科 卒業生、日本鍼灸理療専門学校・研究生

【事務担当者】 山幡 美沙 財務部公的研究支援室